

せんそ  
踐祚

慶応2年12月25日(1867年1月30日)孝  
明天皇が崩御され、睦仁親王(万延元年  
9月28日<1860年11月10日>の親王宣下  
にて御名を賜る)が天皇の位を継承され  
ることとなり、踐祚の儀式が行われまし  
た。踐祚とは、皇嗣が皇位を継承されるこ  
とです。

清涼殿は先帝の葬儀の場とし、小御所  
を新帝の清涼殿代として踐祚に用いた

め、小御所内部は、上段の間を夜御殿代、中段の間を母屋代、東廂を昼御座代、南廂を殿上代等として清涼殿になぞらえ  
られ、それぞれの場所には清涼殿の調度が移設されました。

翌慶応3年正月9日(1867年2月13日)に行われた踐祚の儀式では、あらかじめ剣聖が小御所上段の間に置かれ、天皇  
は、元服前のため総角の髪に引直衣のお姿で、昼御座に着御されました。関白左大臣二条齐敬が御座正面の簀子の円  
座に着座すると、齐敬に対して関白を改めて摂政とする勅命が下されました。摂政に任じられた齐敬は、庭上に控える



小御所(手前から東簀子・東廂・中段の間) ◆  
＜御座を敷いたところ＞



踐祚(御物『明治天皇紀附図』)

蔵人を召して、諸臣の待遇を先朝のままとする  
綸旨を伝えました。蔵人が陣座に戻り、上卿(行  
事責任者)の内大臣近衛忠房に伝え、摂政  
以下が庭上に出て、慶を奏しました。

踐祚の後、天皇はしばらく御三間を御在所とさ  
れていましたが、慶応3年11月7日、御代替わり  
による修理が完了した御常御殿に遷御されまし  
た。

ここで紹介した『明治天皇紀附図』の写真を「京都御所 宮廷文化の紹介」<平成30年秋>にて小御所前に展示します

こごしょかいぎ  
小御所会議



小御所会議（御物『明治天皇紀附図』）

慶応3年12月9日（1868年1月3日）、  
 王政復古の<sup>おうせいふっこ</sup> 大号令<sup>だいごうれい</sup>が発せられた日の夜、  
 天皇出御のもと、新任の<sup>そうさい</sup> 三職（總裁・  
 議定・参与）および名古屋・福井・広島・高  
 知・鹿兒島5藩の<sup>たいせいほうかん</sup> 重臣により、大政奉還後  
 の<sup>とくがわよしのぶ</sup> 徳川慶喜の処遇をめぐる会議が行われ  
 ました。

中段の間の東側（天皇の座からみて左）には、<sup>ありすがわのみやたるひとしんのう</sup> 總裁有栖川宮熾仁親王・<sup>にんなじのみやよしあきしんのう</sup> 議定仁和寺宮嘉彰親王・<sup>やましなのみやあきら</sup> 同山階宮晃  
<sup>しんのう</sup> 親王・<sup>なかやまだやす</sup> 同中山忠能・<sup>おおぎまちさんじょうさねなる</sup> 同正親町三条実愛・<sup>ななみかどつねゆき</sup> 同中御門経之・<sup>おおはらしげとみ</sup> 参与大原重徳・<sup>までのこうじひろふさ</sup> 同万里小路博房・<sup>ながたにのぶあつ</sup> 同長谷信篤・<sup>いわくらともみ</sup> 同岩倉具視・  
<sup>はしもとさねやな</sup> 同橋本実梁が着座し、西側には、<sup>とくがわよしかつ</sup> 議定徳川慶勝（前名古屋藩主）・<sup>まつだいらよしなが</sup> 同松平慶永（前福井藩主）・<sup>あさのもちこと</sup> 同浅野茂勲（広島藩  
<sup>やまうちとよしげ</sup> 主）・<sup>しまづもちひさ</sup> 同山内豊信（前高知藩主）・<sup>しまづもちひさ</sup> 同島津茂久（鹿兒島藩主）が着座し、御前に親王・公家と武家が対座しました。また、  
<sup>おおくほいちぞう</sup> 下段の間には、大久保一蔵（利通）や<sup>ごとうしょうじろう</sup> 後藤象二郎等の五藩の重臣が着座しました。

会議では、中山忠能による開会の宣言の後、慶喜の朝議への参加を主張する豊信・慶永と、慶喜の官位の辞退と土地人民の返納を説く具視を中心に、激しい議論が交わされました。

小休止をはさんで会議が再開されると、豊信等が譲歩して議論は収束し、最終的に慶喜へ辞官納地を通告することが決定しました。



小御所（奥から上段・中段・下段の間）◆

きたびさし 小御所 北廂 襖絵「清涼殿十月更衣」  
こうい 「鷹狩」

この襖絵は以下の展示会に出展します。  
復古やまと絵 新たなる王朝美の世界  
— 訥言・一蕙・為恭・清 —  
(平成26年10月4日～11月9日)  
徳川美術館本館展示室及び名古屋市蓬  
左文庫展示室  
(愛知県名古屋市東区徳川町1017 及び  
名古屋市東区徳川町1001)



小御所は上段の間、中段の間及び下段の間の三室を中心とし、その周りに廂の間が設けられている御殿です。北廂にある襖には、岡田(冷泉)為恭の「清涼殿十月更衣」と「鷹狩」が画かれています。

小御所は、安政度御造営の折には、14名の絵師が分担して障壁画を画きましたが、昭和29年8月16日五山の送り火に際し行われた鴨川の花火大会の花火の残火により、建物は被害を受けて多くの障壁画が焼失しました。現在

小御所にある襖絵は、建物の再建に伴い昭和33年に制作されたものです。

安政度御造営の折、北廂の襖絵6面は、岡田為恭が担当しました。その障壁画は昭和初期、為恭傑作と讃えられ博物館に展示されるなどして模写が作成され、それが詰められていました。そのため昭和29年の火災の被害に遭わなかったもので、現在は収蔵庫に保存されています。

幼少の頃から絵画を好んだ為恭でしたが、幕末の動乱に巻き込まれ42歳で没しました。

「清涼殿十月更衣」は北廂の上段の間に面する西側にあり、宮中の年中行事の一場面、清涼殿での更衣の様子を画いています。更衣は現在の春・秋の衣更えにつながるもので、旧暦の4月1日に夏物の装束や調度類に取り替え、10月1日に冬物に取り替えます。この画題は十月更衣ですので、冬物に取り替えている場面です。



現在の清涼殿御帳台の帳

とぼり あしにつるもん  
御帳台の帳の様子は、夏は蘆鶴紋、冬は  
くちきがた のすじ  
朽木形となっています。野筋(右写真中の赤  
と黒の紐)は蝶鳥紋です。



蘆鶴紋(夏)



朽木形(冬)



北廂東側にある「鷹狩」の図は、鷹などを操り小動物を捕らえる狩り、鷹狩(放鷹)を行う場面を画いています。

鷹狩は、日本書紀に仁徳天皇の時代に初めて行ったと記され、その後律令制により兵部省に鷹などの飼育や調教などのために主鷹司が整備されました。

平安時代の嵯峨天皇は、鷹狩りに関する漢詩や技術書「新修鷹経」の編纂を行うくらい鷹狩りを愛好されたようです。

天皇が鷹狩のために行幸することを野行幸といい、京都でよく野行幸された場所は、大原野や嵯峨野などでした。



鷹狩は公家のみならず、将軍家などの武士も行いました。鷹狩にて捕らえた鶴などは将軍家から天皇家に献上されました。

清涼殿には、「鷹狩」と似た題材で「嵯峨野小鷹狩」(土佐みつきよ こんめいちのしょうじ 光清作)という絵が昆明池障子の北面に画かれています。



京都御所・清涼殿弘廂にある昆明池障子の北面

はくがしょうしき  
小御所 杉戸絵「伯牙鍾子期」



小御所 杉戸絵「伯牙鍾子期」 画：岸竹堂（模写：西堀刀水）

左の写真の杉戸絵は、中国の故  
事によるもので、「伯牙鍾子期」と  
題され、小御所の西廂と御拝道廊  
下（小御所西廂から清涼殿に続く  
廊下）の境に填められています。

この題材の杉戸は寛政度内裏  
（寛政2～嘉永7年〈1790～1854〉）  
にも同じ場所にあり、安政度の御  
造営では、岸派4代目の岸竹堂が  
担当しました（昭和29年〈1954〉に  
火災により小御所が焼失したた  
め、現在のもは昭和33年再建時  
に模写されたものです（模写：西堀  
刀水））。

竹堂は、京狩野派の9代目狩野永岳に絵  
を学びましたが、粉本（画家が参考にした  
模写などの手本）を写す形式的な技術だけ  
でなく写生画風の技法を習得するため、岸  
連山にも指導を受けました。連山は、岸派  
に四条派の写実的な画風も取り込んでい  
たため、その指導を受けた竹堂は岸派、狩  
野派、四条派を折衷したような画風で活躍  
しました。

竹堂は、連山の養子となり、連山亡き後  
は岸派を継ぎ、京都画壇の一人として様々  
な画家を育成するなど活躍しました。さら  
に、幕末から明治初期にかけての激動の  
時代には、友禪の下絵を描くなど友禪の世  
界でも才能を発揮しました。



琴を弾く伯牙

画面の左面に琴を奏でる伯牙とお茶を用意する人物、右面には伯牙の琴を聞いている老人鍾子期が画かれています。

伯牙は、琴の名人で、一方の鍾子期は、伯牙が弾いている音色により、伯牙が何を思い浮かべて弾いているのかがわかる人物でした。そのため伯牙は、鍾子期が自分をよく理解してくれる人物であり、良き聴き手とっていました。しかし、鍾子期がこの世を去ると、鍾子期ほどの良き聴き手がないのであれば、琴を弾く意味がないということで、琴を壊して弦も切り、二度と琴を弾こうとしなかったと伝わっています。この故事にちなんだ意匠は、京都の夏の風物詩、祇園祭における山鉾のひとつ「伯牙山」にも見ることができます。



伯牙の琴の音を聞く鍾子期



「伯牙鍾子期」に画かれている琴



きっこうてん  
小御所障壁画「乞巧奠」に画かれている琴



伯牙が弾いている琴は、中国の古琴で七弦琴と呼ばれるものです。周の時代にあったとされるほど琴の歴史は古く、琴に関する故事もいくつかあります。この琴は弦が7本で、音程を調整するための琴柱ことじがありません。現在よく目にする13弦で琴柱のあるものは、本来「箏」と書かれ、小御所の襖絵「乞巧奠」きっこうてんに画かれています（写真：中段右側）。中国では古来、琴は「琴棋書画」という四芸の一つに数えられ、教養のある文人のたしなみとされており、古くから画題に取り上げられました。ちなみに、この「伯牙鍾子期」の裏面は「王質」おうしつと題される絵で、そこには棋（碁）を打っている様子が画かれています（写真：下段）。



小御所 杉戸絵「王質」画：岸竹堂（模写：福山峯水）



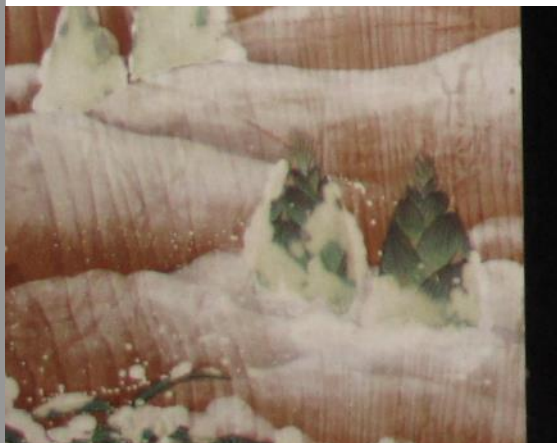


現在御殿廊下にある「雪竹」(昭和33年模写)



もうそうせつちゆうにたけのこをうる

御花御殿南御縁座敷「孟宗雪中得笋図」画:廣瀬栢園



雪の間から顔を出す筍

まずは、小御所と御学問所をつないでいる廊下(小御所側)にある「雪竹」と題される杉戸です。右面には太さの異なる4本の竹が画かれ、雪が積もっている笹が両面に画かれています。この裏面には「夏草に鷺」と題された夏の絵が画かれています。

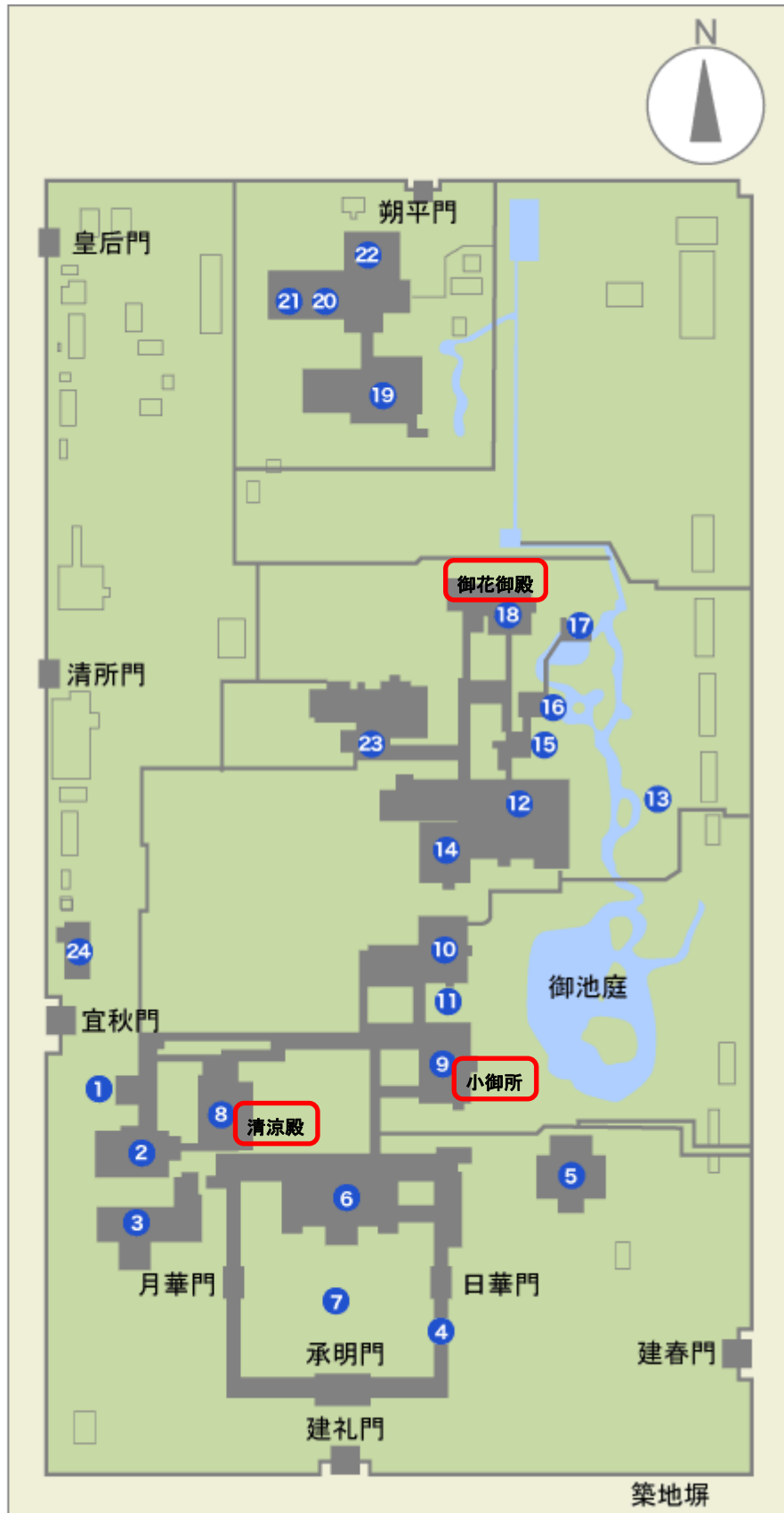
この杉戸絵は、安政度御造営(1855年)  
あんどたんがい  
 時には安藤丹崖により画かれました。この杉戸は昭和29年に起きた小御所の火災による焼失を免れています。現在は収蔵庫で保存され、御殿には模写されたものが詰められています。

おはなごてん  
 次は、御花御殿(御常御殿などの北側にあり、皇太子のお住まいなどに充てられた建物)の南御縁座敷にある  
みなみごえんざしき  
 「孟宗雪中得笋図」と題される杉戸です。  
もうそうせつちゆうにたけのこをうる  
 中国三国時代の呉の孟宗が、筍(笋)  
もうそう  
 を食べたいと望んだ病気の母のために、冬場に竹林へ筍を探しに行きました。しかし、なかなか見つからず、何とかして筍を持ち帰りたいと願ったところ、地面から筍が出てきて持ち帰ることができ、母を喜ばせることができたという故事を杉戸に画いたものです。孟宗竹という竹の名前は、この故事にちなんでいます。

この作品の右面には手に鎌と筍を持つ孟宗が、左面には筍が雪の間から頭を出している様子が画かれています。安政度にこの杉戸絵を担当した廣瀬栢園は、岸派の祖岸駒から絵を学んだ父の影響により、岸派の得意とした写実的な描写を特徴とし、様々な人物花鳥画を画いたとされています。

# 京都御所案内図

- ① 御車寄
- ② 諸大夫の間
- ③ 新御車寄
- ④ 回廊
- ⑤ 春興殿
- ⑥ 紫宸殿
- ⑦ 南庭
- ⑧ 清涼殿
- ⑨ 小御所
- ⑩ 御学問所
- ⑪ 蹴鞠の庭
- ⑫ 御常御殿
- ⑬ 御内庭
- ⑭ 御三間
- ⑮ 迎春
- ⑯ 御涼所
- ⑰ 聴雪
- ⑱ 御花御殿
- ⑲ 皇后宮常御殿
- ⑳ 若宮御殿
- ㉑ 姫宮御殿
- ㉒ 飛香舎
- ㉓ 参内殿
- ㉔ 参観者休所



**観**マークは、参観でご覧になれます。申込み方法は、<http://sankan.kunaicho.go.jp/> をご覧ください。

**通**マークは、申込不要の京都御所通年公開でご覧になれます。

詳細は、<http://www.kunaicho.go.jp/info/kyototsunen-sks-sankan.html> をご覧ください。

これまでの「《京都》御所と離宮の栞」については、宮内庁ホームページの[こちら](#)からご覧ください。

<問い合わせ先>  
 〒602-8611 京都市上京区京都御苑3 宮内庁京都事務所  
 代表電話：075-211-1211 参観係直通電話：075-211-1215